

NO. 496

2017年8月20日

町田市玉川学園4-5-32

TEL. 042-732-9321

FAX. 042-732-9337

玉川教会たより

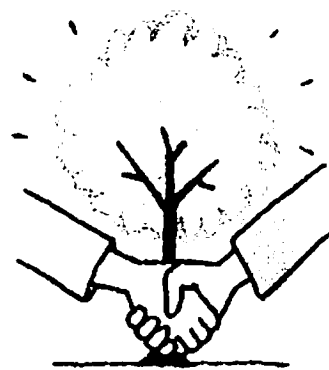
『さよならだけが人生か』 … 抜粋 使徒言行録20:17~35

▼8世紀、唐の詩人、干武陵（ウブリョウ）という人に「歡酒」という漢詩があります。

勸君金屈旨	君にすすむ	金屈し（きんつくし）
満酌不須辞	満酌	辞するをもちいず
花発多風雨	花ひらけば	風雨多し
人生足別離	人生	別離たる

井伏鱒二が、この漢詩を次のように訳しました。

この盃を受けてくれ
 どうぞなみなみ つがしておくれ
 花に嵐のたとえもあるさ
 さよならだけが人生だ



▼花発多風雨（花ひらけば 風雨多し）、井伏鱒二の訳では、花に嵐のたとえもあるさ、正に人生はこうしたものです。

せっかく咲いた花も、必ず散って行きます。巡り会い、素晴らしい交わりを与えられた人々は、何時の日にか、必ず去って行くのです。或いは、愛する人々を遺して、自分が、去って行かなくてはならないのです。

人生足別離（人生 別離たる）、さよならだけが人生だ。全くその通りなのです。これが否定しようもない、私たちの人生なのです。

▼別れの悲しみとは、それまでに積み上げた一切のことが、無に帰することへの恐れです。将来のことに不安があるというだけではなく、これまでの歩みが否定されるという恐怖なのです。

▼17~19節、特に19節をご覧ください。

「自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、
また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた
試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました」。

決して好き好んで、ではなく、仕方なしに、受け入れた出来事であり、状況です。

▼過酷な出来事を、唯、謙虚に受け止め、受け入れ、その中で精一杯に歩いて来たのです。その辛い戦いの日々を支えたものは、信仰であり、使命の自覚です。つまり、『主にお仕えしてきました』。どんな場合にも、そこに主の御心が働いていると信じて、耐えることが出来たのです。

「自分を全く取るに足りない者と思い」、
自分の力を頼みとする時には、結局、挫折が待っているのです。
敗北に捉えられるのです。

しかし、そこに主の御旨を見る時には、『自分を全く取るに足りない者と思い』、『主にお仕えしてきました』。耐えて働き続けることが可能になります。 … 2頁に続く。

1頁から…

自分を主に仕える小さいものとする時に、耐えることが出来、自分の力を誇る時には、必ず滅びに定められるのです。

▼私たちの人生は、そして私たちの仕事は、(花ひらけば 風雨多し)です。花は何時かは、散ります。さよならだけが人生だ。全くその通りです。

しかし、私たちがどうなろうとも、神の御業は継承するのです。

パウロの業ではなく、神の御業だから、継承するのです。

これは、全くの現実です。

使徒言行録を通じて知っておりますように、パウロは、地中海世界の各地に教会を立てました。パウロの伝道の結果生まれた教会は沢山あります。

しかし、今、その教会は、ただの一つとして存在しません。建物も、組織も、一つとして存在しません。

それでは、それらは全く無に帰したのか、そうではありません。例えば、私たちのこの玉川教会だって、その歴史を辿って行くなれば、パウロにまで行き着くのです。

ただ、それらはパウロの教会ではありません。主の教会なのです。

主の教会だから、2000年の時を経て、存在し続けるのです。